

文化服装学院 学校関係者評価委員会 報告書

文化服装学院 自己点検・評価委員会

2025年3月1日

目 次

1. 報告書骨子	2
2. 学校関係者評価委員	2
3. 学校関係者評価委員による文化服装学院自己点検・評価に対する総評	3
4. 学校関係者評価委員による文化服装学院自己点検・評価への提言	4
1) 教育理念	4
2) 学校運営	5
3) 教育環境	8
4) 学修成果	11
5) 教育活動	15
5. 学校関係者評価を受けて	24
6. 学校関係者評価委員会開催日程	25

1. 報告書骨子

学校関係者評価委員会（以下、当委員会）は、文化服装学院学校関係者評価委員会規程に基づき、平成25年4月1日に設置した。当委員会は文化服装学院（以下、本学院）の自己点検・評価の結果について客観性と透明性を高めるとともに、学外の関係者から専門的な助言を得るため、外部評価を実施する機関として組織した。

当委員会は、本学院の自己点検・評価を基に、自己点検・評価委員会の内部評価を参考に、関係教職員との具体的な意見交換を通して、本学院の学校運営・教育活動について検証・評価及び助言を行うことを目的として実施している。

当委員会委員は外部委員のみで構成され、本学院の教育理念を理解し、人材育成等に精通した学外の関係者の中から学院長が選考し、委嘱している。委嘱された委員は下記のとおりである。

2024年度は、2023年度の本学院の取組みに対し、当委員会としての評価・助言をいただいた。本報告書はその評価・助言をまとめ作成したものである。本報告書に記載した評価・助言は、具体的な事項であり、本学院の発展に資するという考え方方に則り、過度に要約することなく記載している。

本報告書の作成にあたり、当委員会の委員の方々には、お忙しいところご尽力いただき、改めて深く感謝申し上げる。

2. 学校関係者評価委員

委員長	澤田勘志（株式会社MORIパーソネル・クリエイツ 代表取締役社長）
委員	木島 広（株式会社フクル 代表取締役・本学院卒業生）
委員	岡本真理子（株式会社スマートウイル コンサルティング事業部門 シニアマネージャー）
委員	小湊千恵美（株式会社レコオーランド ファッションディレクター コレクション担当・本学院卒業生）
委員	前川 祐介（株式会社エークローゼット 取締役副社長）
委員	河邑 陽子（株式会社纖研新聞社 本社編集部 学校担当リーダー）

3. 学校関係者評価委員による文化服装学院　自己点検・評価に対する総評

2023 年度の自己点検・評価は、100 周年を機に「時代に合わせて変えていこう」、「新たな一步を踏み出そう」という強い意志を形にするべく多くの活動が行われ、それらを厳しい視点でもって点検・評価することに努めており、「次の 100 年へ繋げていこう」という真摯な熱意が感じられるものだった。

向かうべき方向性、果たすべきミッションが共有され、それに向けて各自、各部門が考え、改善点を見つけ、その中で優先して何に取り組み、解決するのかを総合的に判断、決定し、具体的な目標と戦略をたてて実践するという、一体感をもった取り組みが今後さらに行われていくことを期待する。

今年度、様々なアップデートや取り組みがなされた中でも特に 100 周年を機に教育理念が「国際的な共創教育」へと広がったことを受け、学生の将来につながる学びや経験、活動の場の開拓、サポートに注力し、成果を上げていることを評価する。

インターンシップや企業とのコラボレーション、産地見学やコンテスト参加へのサポート、学生・卒業生の活動の発信など、国内外を問わず学生が卒業生や社会と接する機会を増やし、実践的に協働する場を設けることで、学生自らが自身の特性、志向、あるいは社会的ニーズに気づき、学びを深め、活躍の場を主体的に選択できる力が養えるよう促している取り組みは、「共創教育」の実践として今後も推進されていくことを望む。

また、本学院が保有する優れた資料や充実した施設・設備、卒業生のネットワークを含めた多彩なリソース、そしてそれらのコンテンツ化は、ファッション業界の立場からみても大変貴重であり、価値の高い資産といえる。

本学院がさらに社会との繋がりを得る新たな切り口として、これらの発信や活用を検討しても良いのではないか。

ファッション業界の発展にとって「持続可能な社会への価値を提供できる人材の育成」は不可欠である。ファッション業界へ向けて多くの卒業生を輩出する本学院は、ファッション業界にとって大変重要な立場にある学校であり、これからも様々な教育活動を通じて、ファッション業界を発展、牽引する優秀な人材を輩出されることを切に願うものである。

学生各自の個性・特性を育みながら、時代の変化、社会の要請を鑑みつつ、社会との繋がりの中で、ともに教育活動に取り組んでいかれることを強く望む。

本学院の教育成果と更なる発展に期待している。

4. 学校関係者評価委員による文化服装学院　自己点検・評価への提言

2023年度自己点検・評価において、本学院が設定している評価項目に対する委員からの提言は以下の通りである。

1) 教育理念

①文化服装学院の教育理念

[本学院の現状]

学校教育法に基づき、服飾に関する専門知識・技術を教授研究し、服飾教育界、ファッショントラベル産業界に貢献すると共に、高度な技術と教養を備えた創造性豊かでグローバルに活躍できる人材を育成することを教育の理念としている。

教育組織として、専門分野に特化した4つの課程を設置し、ファッションを通じ持続可能な社会へ価値を提供できる人材を育成するという本学院の社会的責任を果たすべく、本学院が100年に亘って継承してきたつながりを大切にした共創教育を行っている。

課程を超えた協業による学内の交流、企画立案、準備、実行、国内外のファッショントラベル企業や卒業生のネットワーク、コラボレーション事業、インターンシップといった外とのつながりなど、時代に合わせた教育環境を活かした学びの場の提供を行っている。一人ひとりの個性を大切にし、国際化・多様化に対応できる人間力を身に付け、高い専門知識と技術を習得し、ファッショントラベル界で活躍し、社会に貢献する人材を育成している。

[学校関係者評価委員からの提言]

- ・様々なネットワークの中で、国内では他の服飾学校の追随を許さない人材育成が行われている。新たに「国際的な共創教育」という教育理念が掲げられた。数多く国際的に活躍するデザイナー・アーティストを排出しているが、企業家として成功されている方はまだ少ないようだ。世界に通用するアパレル・ファッショントラベル企業を牽引できる人材の育成を願う。
- ・3Dについては業界でも導入が進んできているので、ぜひ充実した選択コースとなるよう期待している。
- ・101年の歴史と教員・職員のこれまで培った経験、卒業生並びに外部企業等の連携を活かした「つながりを大切にした共創教育」を具現化、実行した取り組みを評価する。今後も国際化・多様化・高度産業化に合わせ、持続可能な社会に向けた人材輩出に期待する。
- ・時代の変化に対応すべく、バーチャルファッショントラベルコースのような新しいコースを立ち上げる、企業とのコラボレーションを積極的に行うなど、尽力されていると感じる。最新技術を学んだ人材の輩出は、ファッショントラベル業界にとって非常に貴重である。产学連携して業界が盛り上がっていくことを期待する。
- ・DX化が進むと均一化が進みやすいと想像でき、それに対してクリエイティビティに富んだ人材の重要性が増すと考えられる。もともとダイバーシティが進んだ業界ではあるが、学生の個性を伸ばすことができる場所であることを期待する。
- ・適切だと思われる。特に「国際的な共創教育」について、大いに期待している。
- ・時代に即した…と表現される場合の「時代」とは? より解像度を高めるとどのような要素が想定されているのか。課題の現代性を具体的に何と捉えたうえで、その課題に対応するどのような能力・知見を教育・研究していくとしているのか、学校教職員の共通認識が問われるべき重要な論点であると考える。社会貢献の方法・あり方も時代によって変わるため、より一段具体的な検討が望まれるものと思料する。

- ・「国際的な共創教育」「持続可能な社会への価値を提供できる人材の育成」など時代に合わせた教育環境の提供を志向しており、魅力的な内容となっている。

2) 学校運営

- ①法人組織 ②学校組織

[本学院の現状]

法人では、学園の総合的な業務の効率化に向けたシステム構築や組織活性化に向けた取り組み、働き方改革、改革に伴う規定の見直しを継続して行っている。

事務局および教員組織においては、業務効率の向上と活性化に向けた情報共有の推進、業務分掌の見直しを継続して行っている。

教員のニーズを取り入れた研修の企画・実施体制強化を継続し、教育レベルの維持・向上、専門力の強化を図っている。

教職員による5つの委員会（教育課程編成委員会、学生生活・留学生支援委員会、研究企画委員会、キャリア支援委員会、自己点検・評価委員会）と外部委員による学校関係者評価委員会が組織され、学校運営の改善について問題の提起、検討、解決、検証を行っている。

[学校関係者評価委員からの提言]

- ・勤怠システムの導入やペーパーレス化など、時代に合わせた業務の効率化は常に必要である。また、人事・給与制度の改革にも取り組んでおり、教員・職員にも有意義な職場であることを願う。
- ・研修・研究活動も活発に行われており、素晴らしい取り組みだと感じる。
- ・新システムによるDXを評価する。今後のさらなる合理化に期待する。
- ・組織機能の集約や機能の民営化、外部管理化など様々な可能性を調査検討を望む。
- ・業務効率化に向けた業務分掌の適正化による組織的成果を評価する。今後のさらなる合理化に期待する。
- ・教育レベルの維持・向上に向けた採用活動の強化と、専門性・グローバル人材の確保が必要である。
- ・キャリア支援におけるこれまでの評価基準以外に「新しいキャリア支援における基準」が必要である。内定率以外に本学院が社会に与える影響を数値化し、評価できることも必要と考える
- ・各委員会が課題を認識して活動しており、教員の研修も充実していることから、適切に運営されていると感じる。大きい組織で、数多くの人が関わっているので、モチベーションを保つ工夫なども見えてくると良いと思う。またペーパーレスに向けた取り組みに対し、マニュアルの集約化（Wiki的なリンクを作成するなど）も検討してはどうか。
- ・効率化が達成された後の状況（ゴール）の具体的な共有が重要である。削減・改善目標の定量化により、教職員の積極的な改革への協力体制を維持・担保する方策がとられているかと、改革疲れの防止が重要である。
- ・学生生活調査アンケートの目的は何か？目的に対して学生生活調査アンケートの内容・手段は適切か？学生生活調査アンケートの回答率が高まらない理由は何か？喫緊の課題把握であれば、項目に優先順位をつけて早期回収していくべきでは？
- ・専修学校の学生の進路選択として、総合職への応募は少ないのか。家政系の大学学部卒業者は応募はあるが、文化服装学院からいわゆる総合職への応募は少ない。汎用性+専門性の人材であって、専門教育の意義が進路を狭める方向に向かっていないかの懸念あり

- ・新ワークフローシステムの導入、共有ドライブの活用など、業務の効率化に向けた取組みが進んでいることは評価できる。多様な働き方の実現、長時間労働の是正に向け、どうシステムを活用するかなど更なる取組みの継続を期待したい。
- ・教員研修は、新採用や新主任向け他、各種技術研修、学生対応やハラスメント防止まで幅広く活発に行われていて評価できる。
- ・留学生への基礎語彙集の再配布など援助の強化も評価できるが、就職支援など更なる支援強化が望まれる。
- ・キャリア支援室と教員間の連携強化による内定率向上は評価できる。今後もキャリア支援室を活用する学生が増え、自分の進みたい方向性を見つけられ、行きたい企業が見つかるように学生の支援を進め、内定率が向上することを期待したい。

③財務状況

[本学院の現状]

学生数確保の取組みにより、学納金収入の維持につなげている。文部科学省の修学支援制度は認定申請を継続して行なっている。東京都や私学財団の補助金を活用し、教育備品等の充実に努めている。

各種の経費支出については、個々の取り組みと経費支出のバランスを考慮した運営に引き続き取り組む。

学園全体の人員配置・人員補充については学園の方針に従い、適材適所の配置など、適切な労務管理及び内外情勢に配慮しながら、人件費抑制の取組みを行っている。

[学校関係者評価委員からの提言]

- ・収支・財務の状況に関しては、全般的なコメントがなかつたことから単年度の決算で評価することが難しい。
- ・補助金収入の増加を評価する。教育費の適切な運用における経費の低減については継続する。
- ・予算に対して支出が大幅に超過している。精度の高い予算の策定が重要である。
- ・学生数の減少に対する取り組みを継続することに加え、収益事業の強化としてのデジタル化・グローバル化・コンテンツ化などの学院の持つリソースや資産を収益にかえる複合的な戦略が必要ではないか。
- ・学院の財務影響の大きい収益事業部門に関する評価も重要である。
- ・昨年に対して経常利益の増加は不動産事業によるもので、収益事業の要の不動産事業の時勢による安定性を担保できる対策を検討する必要がある。
- ・損益計上している出版部門の早期改善に対する時流に合った投資が必要だろう。
- ・具体的な数値で表現されていて理解しやすいと感じた。国内人口減の中、学生数の水準を維持している点は大きく評価できる。収入減の見込みに対し、補助金の活用、経費削減など多面的な対策を推進している点も評価する。
- ・厳しい時代であるということを考慮しつつも、改善に期待する。
- ・「将来を見据えた方針」の記載にある通り、「健全な学園財政の実現に、学園の各部署、教職員の一人一人が、協力を求めていく必要」があるように感じる。
- ・今後の評価・点検の各項目の観点に、財務健全化にかかる課題を共通で取り入れる（コスト削減・収益増のいずれかもしくは両方）など、かかる状況の浸透と、当該メッセージの実行を担保した取り組みを推進することを提案する。
- ・補助金の活用と収入増の具体策が示されている点は評価できる。
- ・学生数の維持に向けた取組みの結果、学納金も維持されている点も評価できる。学生数の減少に対応する中長期策に着手している。具体策とその進捗状況についても報告を望む。

④法令等の遵守

[本学院の現状]

学則および各種規程、関連資料のデータ化、クラウド化を進め、関係者がいつでもアクセスできる環境を実現した。

個人情報保護については、規定の遵守に努め、トラブルなるような事例は発生していない、ハラスメント防止研修を実施し、ハラスメント防止啓蒙に努めた一方、学生等からの相談内容を必要に応じて共有し、担当教員に確認を取りながら、適切な注意、指導を行った。ハラスメントと認定される事案は見受けられなかった。今年度も、ハラスメントに関するアンケートは実施できなかった。

[学校関係者評価委員からの提言]

- ・データをクラウド管理に変更したことは大きな進歩である。
- ・個人情報の取り扱いについては十分注意している。
- ・ガイドラインの周知の方法について記載を望む。
- ・データのクラウド移行、電帳法対策の新システム導入におけるルール構築などの運用を評価する。
- ・個人情報保護、ハラスメントにおける具体的対策の策定は急務である。
- ・ハラスメントも個人情報保護に関しても、トラブルが起きてからでは遅い。トラブルが起きない状況を作るために様々な予防策を講じていることを評価するマインドセットを持ってもよいと感じる。また母数が多いため、満足度アンケートや学生の情報を分析することで学校運営のヒントがみつかるだろう。
- ・教育におけるパワハラ等の線引きは非常に難しいと思うが、社会で強く生きていく人材育成を期待している。
- ・ハラスメント防止規定の有無の確認、記載内容の確認。運用できなかったことの根本原因の特定と是正措置は、状況の報告含め急務であるとする評価を支持する。ハラスメントに関わる問題はすでに重要な社会的要請であって、当該問題の重要性が真に理解されていない可能性もあるため、学校に与える影響、教職員や学生個人に与える影響などについて定量・定性両面から経営レベルで検討するべきである。
- ・ハラスメント調査は、前年も実施できていない。できない原因を知りたい。リアルな現場の意見を拾っていかなければ、具体的な対策・必要な取り組みは見えてこないと思う。
- ・ハラスメントについては、アンケート調査など実態を把握する仕組み、意見や相談を受け付ける仕組み作りなど改善策が急務との指摘は適切である。改善を望む。

⑤社会貢献等の取組

[本学院の現状]

文化祭にて行ったバザーの売上金を社会活動団体へ寄付を行った。作品を製作し、販売、売上金を寄付する社会活動を通じて社会貢献に対する意識向上が見込まれる。

学友会活動の一環で行なう「赤い羽根募金」と「口と足で描く芸術家協会作品の販売協力」は、社会事業専門委員会の学生、教員の尽力により継続実施している。

広く一般の方々へ学びの場を広げるべく、生涯学習講座としてオープンカレッジと通信教育を実施している。多様な受講生のニーズに対応するため、オープンカレッジ、通信教育共にオンラインを積極的に活用し、ライブ配信、オンデマンド配信、対面授業を組み合わせた授業を企画実施している。

[学校関係者評価委員からの提言]

- ・例年、社会貢献への取り組みはその都度動いており素晴らしい。
- ・学院としての社会貢献活動については過不足なく行えている。

- ・募金だけが社会貢献ではなく、実際には SDG's を意識したコラボレーションや生涯学習の提供など様々な活動をしている。
- ・日本赤十字社への寄付行為が学院のめざす社会貢献とどう結びつくのか、再検討の余地があると考える。なぜ他の団体ではなく、同団体なのか。寄付行為の先に何が生まれているのか。建学の精神や教育理念とより密接に結びついた「社会貢献」の在り方について、根本的な認識合わせが必要なのではないか。この観点からも、次年度以降、授業や産学コラボレーションや SDG's に関する取り組みに関する点検項目と、社会連携・地域連携に関する点検項目を一つのテーマに集約し、新たに記載する方向で次年度以降進めるという意見を支持する。
- ・社会貢献について、寄付行為以外の定義、抽出が必要との指摘は適切である。授業や産学コラボレーションで現状でも社会貢献に繋がる取組みを行っている事例があると思う。次年度以降の新たな記載に期待したい。
- ・公開講座は、一定の収益を上げることに寄与されているのか。収益性は別の問題として、毎年の活動に対して高く評価する。
- ・公開講座・教育訓練などの新規受講者獲得に向けた継続的な取り組みを期待する。
- ・生涯学習型の公開講座等の活動についても、実施する手段の洗練に意識があり、満足度を高めることができが目的となってしまっていないかを懸念する。講義を受講した方が何を得たのか、その積み重ねが、社会に何を生み出したのか、延いては、学院がどのようなレピュテーションを受け、新たな期待を得ることになったのか。定量的な実績（参加人数や収支）のみならず、目的とする状態に近づけているかどうかを検討する必要があると考える。アウトプット＜アウトカムに意識を向けるべきであると思料する。
- ・公開講座は意欲的に課題を設定し改善に向けて取り組んでいる姿勢は評価できる。より多くの人が学ぶ場として、より開かれた存在となることに期待したい。

3) 教育環境

1 施設・設備

[本学院の現状]

2023 年度クラスの増減に合わせ、授業運営に滞り概要ないよう調整を図った。就職活動支援の一環として、新たに撮影用の実習室を整備した。施講義室や実習室の使用申請については Web 予約制度が浸透し、管理の簡便化と教員の業務負担軽減につながった。老朽化した施設・設備のリニューアルを計画的に進めている。施設・設備・備品の計画的な管理・運営については、恒常的で重要な課題であり学園全体での調整と改善に引き続き務める。

[学校関係者評価委員からの提言]

- ・本年、学校関係者評価委員会主催の学校見学には参加できなかったが、別の機会に学内見学の機会があった。設備の充実度合に大変驚いた。
- ・教室・講義室・実習室・研究室・事務室の整備・使用状況について、適切な維持管理と使用の調整が行われている。
- ・機材・備品の管理状況について適切な維持管理と使用の調整が行われている。対応年数を超えた備品の入れ替え計画等では、実習室の設備で使用頻度や設備の必要性などの評価を行い、入れ替え計画の見直し等も必要ではないか。
- ・IT 環境の整備・管理状況について、適切に運用をされている。
- ・IT 環境は常に進化しているので、継続的な整備が必要だと思う。3DCAD など最新機器が導入されている一方で、校舎は年月を感じることもあり、バランスを見ながら設備投資計画を推進することを望む。
- ・IT 環境の整備・管理状況について、システムごとの導入の目的・目標の明記と、導

入後の目標達成状況についての振り返りが必要であると考える。ある手続きを従来手法で実施した場合の課題が、システムの導入や運用拡充によってどの程度軽減・改善されたのかをしっかりと管理することで、課題の解決を確認したり、追加施策の必要性について具体的に論じることができるようになる。講義室・実習室の予約管理台帳の運用方法が Google drive に集約され、かつ周知された件についても、「問題がなかったこと」にとどまらず、利用状況の推移や傾向などをデータから分析し、より一層効率の良い施設運営を検討する材料を取り出し、改善を生み出していくことが良いと考える。

- ・計画的に教育環境の整備に取り組んでいる。施設・設備に関して、使用者である学生や教職員にアンケートを取り改善するなど、多方面からの検討も必要との指摘にも共感した。

2 付属機関・施設

[本学院の現状]

学生に対し情報や機会を創出し提供する学修支援機関・施設として、図書館、服飾博物館、ファッショントリソースセンター、国際交流センターを設置し、学内外における活動の広がりを支援する積極的な取り組みを行っている。

学生に対し生活をバックアップする生活支援機関・施設として健康管理センター(医务室)、文化購買事業部、学生食堂、学生寮などを設置している。

対外的な活動の広がり支援と共に多角的に学生への還元を目的に、文化・服装形態機能研究所など、研究機関や付属機関、施設を設置している。

[学校関係者評価委員からの提言]

1. 教育・学修支援

- ・図書館は、利用環境等の整備が行き届いていた。歴史的に見て重要な文献、雑誌などの所蔵が多く、デジタルアーカイブとしての収益事業等のさらなる利活用を検討すると良い。
- ・図書館で行われている「私を創った本」の企画は興味深い。課題などの必要性に応じて図書館を利用する学生が多いと思われるが、このような企画で幅広くバーチャル体験を積む読書の楽しさも伝わると良いと思う。
- ・ファッショントリソースセンターは、優れた資料と運用が行われており、他校には見られない充実した施設である。これを校外向けに発信・活用の可能性を検討してはどうか。ファッショントリソースセンターへの貢献度が高まるのではないか。収益事業等の利活用も検討すると良い。
- ・産地交流や海外との交流もさらに進めて、学院の発展につなげていくと良いと思う。
- ・服飾博物館は、適切な運営が行われている。
- ・国際交流センターは、各取り組みが運用・活用されている。より多くの学生の利活用を促すPR方法を検討すると良い。
- ・グローバルに活躍する先輩からお話を聞く機会は、現学生へのグローバルな意識への啓蒙活動につながると思いますので、ぜひ継続して欲しい。
- ・学校関係者評価委員会主催の学校見学会に参加し、とても優れた資産や施設を保有していることについて理解が深まり、これを最大限活用していないことに大きな課題を感じた。
- ・外部のリソースやアイデアを用いて収益や外部との交流の促進に繋げていくことに期待する。
- ・服飾博物館と図書館は非常に高い水準の施設で、学外へ向けての広報材料として大きなポテンシャルがあると思う。

- ・図書館の利用者数の目標値とその理由が前提にあったうえで、来館者数や貸し出し冊数の多寡が評価されるべきであり、「サービス向上」がどのような意味を持っているかが不明確で、改善に結び付きにくい表現となっているようを感じる。（利用者数や冊数、アクセス数などの数値に目が行き過ぎている印象。）図書館システムの更新についても、更新後の課題検討や課題改善に向けた活動を行っていく必要があると考える。
- ・服飾博物館、ファッショナリソースセンター、国際交流センターも同様に、それぞれの点検・評価の対象となっているアクション（取り組み）が各施設の設置目的や学校経営戦略上のどの目標に対して紐づくものなのかが明確でないため、評価自体が難しいと感じる。外形上「良さそうに見える」アクションが本当に「良い」アクションであることを示すためには、判断基準となる目的・目標の明確化が必要であると考える。
- ・各施設で計画的に創意と工夫が見られる学修支援につながる取り組みが行われている点は評価できる。

2. 学生生活支援

- ・各施設において、安心して学生生活を過ごすことのできる環境を整えている。
- ・各部署の点検評価でさらに満足度の向上を期待する。
- ・学生に対するサービスは適切に運用されていると思うが、現時点の学生満足度を知るのは、今後の改善のきっかけになるのではないかと思う。授業だけでなく、学生生活全体に関するアンケートを検討してみてはどうか。
- ・学食の設備機器は定期的に入れ替えを行っているようで安心感が持てる。
- ・学生の健康管理も含め、衛生管理はもちろん大切だが、メニューの見直しやサービスも充実させることを望む。
- ・健康管理センターサイトの作成・周知と学生のアンケート回答率が低いことの事実について、健康情報の提供に関して関心が薄いと結論付けるのは早計である可能性を懸念する。第一に、本件以外の学院からのメール全体の開封率を確認し、さらにその内訳として他の分野のメールに比して健康管理センター関係のメールの開封率が相対的に低いことが確認されることが望ましいと考える。

また、メールを開封した学生のうち、何名の学生が回答したことを持っての回答率であるかも重要である。アンケート自体の回答負荷が高いことや、回答目的が分かれにくく、結果として回答提出に至らない場合もあるため、振り返り・点検・評価において定量的な視点を利用する場合には、論理的・統計的な視点を取り入れ整理することが必要であると思料する。（たとえば、外部開催の就職セミナーやイベント情報のGメールとの開封率やリアクションの比較などが具体的に想起される。）

- ・医務室を訪れる学生の用件・症例の傾向など、定性的な視点を加えた振り返りを行うべきである。
- ・学生寮については課題（取り組みの目的）とする「学生の安心」とは何であり、どのようにしてそれを実現しようとしているのかを明確化する必要があると考える。
- ・健康管理センターの報告は、毎月の医務室の利用者数や利用状況など学生の様子が分かるような記入をしてはどうか。
- ・学生食堂も、学生の意見を寄せてもらう意見箱のようなものを設置するなど要望を聞き、満足度をあげる工夫があるとよいと思う。
- ・学生生活を全面的に支援する体制は整っていて評価できる。

3. 研究・対外活動

- ・継続的なデータの収集には大きな意義があるので、大変なことだとは思いますが、続けていくことを望む。「子供計測」が18年間続いていることには驚きを覚える。
- ・3Dスキャンも時代の流れに沿って活用が開始されていることに頭が下がる。あらたなソフト開発も楽しみである。
- ・学院としての研究成果、学外との協業などを評価する。適宜、発信を行い学院の社会的貢献を広く周知すると良い。
- ・経年変化の計測データ収集や障害者衣料の研究など、貴校ならではの活動を継続していく大変素晴らしい。積み重ねてきた努力に敬意を表す。さらに、データや分析を発信する機会があれば、学院の価値向上につながるのではないかと考える。
- ・管理・運用しているプロジェクトの全体観が分からない。個別のプロジェクト（研究）においては、個別に課題や更なる成功要件が言語化されており、研究活動が充実していることの心証を得ることができた。
- ・独自の研究機関として積極的な計測データ収集、企業との共同研究、学内外との取り組みを行っていることが記載されており評価できる。
- ・適切だと思う。

4) 学修成果

①キャリア支援

[本学院の現状]

教育課程編成委員会等の提言を基にキャリア開発を主題とする科目及びその他科目においても、職業人として必要となるプレゼンテーション能力や人間力を強化する授業内容の検討に取組んだ。

文化学園大学と合同で企業見学を実施し、実際の仕事現場の見学や代表、職人、卒業生から仕事へお取り組み方法等を伺い、企業や職業の理解を深めることができた。

下級年次のキャリア開発、就職対策講座については、担任教員、キャリアアドバイザー、非常勤講師が情報共有、連携して年間計画を立て、行った。学生相談及び面接練習、履歴書・エントリーシートの添削等については年間を通じ、個々の希望や状況に合わせた対応を行い就職率向上につなげている。

キャリア支援委員会の取組として、企業と交流会を実施、担当者や卒業生と情報交換を行った。デジタルやバーチャルファンション、ECに関わる情報共有、異分野とファンションの関わり方についての理解を深めた。

バーチャルファンションコースに関わる求人情報の収集を行った。

インターンシップへの参加意欲が高まる取り組みを行っている。

[学校関係者評価委員からの提言]

- ・就職率 90%は非常に立派な数字であり、評価できる。さらに就職率を上げるためにピンポイントの個別指導が必要になってくるだろう。
- ・キャリア支援に向けた取り組みは整っている。個々の学生に向けた意識の開発を期待する。
- ・早期より多面的多層的なキャリア支援が実施されていて、高く評価できる。
- ・企業の採用活動が年々早まっているので、下級生からの就職への意識づけは今後もさらに大切になると思われる。拡大・継続を望む。
- ・留学生については裕福な家庭も多いことから、就職活動に熱心に取り組まない学生もいることだろう。責任ある社会人として社会貢献をはじめる意義を理解させることが大切だと思う。
- ・企業との取り組みは学院ならではで、簡単にはできないことが数多く行われており、高く評価できる。
- ・新設のバーチャルファンションコースに大いに期待している。

- ・バーチャルファッショングコースに関しては今後、卒業生採用のニーズはどんどん高まっていくはずなので、学院がこのようなコースで人材育成を行っていることを各企業に認知してもらうことが大切だと思う。
- ・AIなど新しい技術が絡むところに若い人の活躍するチャンスがあると思う。サポートする先生方がキャッチアップするのも大変だと思うが、頑張りに期待する。
- ・働き方の多様化について、起業や独立を考える学生もいるのではないかと思うので、そういった学生へ、事例やサポートの紹介といったサポートもあるとよい。
- ・「企業が求める職業人として必要なプレゼンテーション能力、人間力、問題解決能力」について、それらの能力の具体的な定義や教授方法、到達目標などを具体的に定め、試作として振り返りが可能な状態にしていくことが望ましい。
- ・学校側が支援する求人による就職のほか、顕在・潜在的なファッショング領域以外の進路を希望する学生の実態把握や、その支援などについても検討がなされることが望ましい。
- ・クラス担任との連携強化、早期からのキャリア教育の充実に積極的に取り組んでいる点が評価できる。
- ・資料に各年度の就職率の推移があるとよい。

②資格取得支援

[本学院の現状]

例年通り、教室内掲示、ポスター掲示、メール配信、放送などで検定の周知を行ったが、受験者数は減少した。それに伴い、合格者数も減少した。各検定試験取得によって得られる学修効果や技術の向上等、受験の意義や資格取得メリットの周知に引き続き取り組んでいく。

[学校関係者評価委員からの提言]

- ・資格取得支援等は十分な環境づくりはなされている一方で、学生の意識改革というか資格取得の意義や必要性の具体的説明と将来のイメージの共有に課題を感じる。
- ・アパレルでは資格が必須ではない職が多いので、資格取得のメリットや何に役立つかを精査する必要がある。
- ・パターンメーキング技術検定の2級合格者を増やしていくと良い。就職試験でのパターン実技に大きな影響がある。
- ・就職時やその後の活躍を支援するための資格取得支援活動であれば、就職結果のデータと資格取得者の相関を確認し、より推奨されるべき資格や目的に貢献的でない資格取得の推奨の取りやめなど、選択と集中を図ることも有用であるように感じる。是が非でも取得しなければならない資格でないと学生側が判断している可能性もあるため、より多角的に分析する必要性を感じる。
- ・試験当日の欠席者が増え、合格率が低下している課題に対し、根本の精査が必要である。
- ・資格取得の意義について周知する改善策の検討、受験者数減少と合格率低下の原因追査の検討について、対応策を考える必要がある。

3 学生相談体制

[本学院の現状]

学生の置かれた状況とニーズに合わせ、対面面接に加え、電話、オンラインによる相談体制を整え、困りごとの早期発見、介入に引き続き努めている。

日常のサポートだけではなく、進路決定のための行動化や、学生生活に具体的な変化をもたらす介入を、教職員や保護者との連携を図り行つた。

障がいのある学生に対する支援力強化のために、聴覚障がい者当事者の講師を招き

定期的な手話講座を開催するなど、外部機関の協力も得ながら、学生のみならず、教職員のコミュニケーション能力及び伝える力を育てる取り組みを行っている。

教職員や保護者の利用者が急増した。今後もコンサルテーションを強化していく必要性を感じている。

[学校関係者評価委員からの提言]

- ・学生や保護者に向けた相談体制は充足している。継続的なサポート体制を評価する。
- ・非常にデリケートなことに取り組んでおり、評価できる。柔軟に対応している点も評価する。
- ・「教職員や保護者の利用者数が急増した」とあるが、どのような背景で急増しているか。その内容や数もわかると良い。
- ・教職員や保護者を含めた学生支援体制を整え、教職員や保護者の利用者も急増していく、実際に成果が上がっている点、周りの大人と連携して具体的な変化をもたらす介入を行っている点など評価できる。
- ・センシティブな相談が含まれることは承知しているが、相談件数や相談内容の分類、相談事の対応履歴や対応方針の分類など、定量的な視点から状況を分析する必要を感じる。個別の相談事案の解決だけでなく、相談種別ごとの発生要因を広く検討し、相談に至る前に相談事事態を解決していくようなアプローチが必要であると考える。
- ・障がい学生、多様性の視点も評価できる。障がい学生への支援強化に期待したい。

4 経済支援・健康管理

[本学院の現状]

学生及び保護者に対し、制度の理解向上に努めており、給付型奨学金制度については、適切に運営するために、出席率の低下がみられる学生に毎月指導を行い、給付を受けることへの意識を向上させることができた。貸与型奨学金については、学生に対し奨学金制度の概要について説明会を開催し、返還の義務や学業に励むことの大切さの理解を深めることができた。また、学生への連絡を適宜行うことで、返還誓約書等提出書類の提出遅延を大幅に解消することができた。

本年度は、卒業後の留学奨学金や能登半島地震等、様々な状況の学生が多く、学生及び保護者に対して丁寧に説明を行うことで、学生の適切な奨学金申請・採用につながった。

健康診断について。卒業年次Ⅰ部の受診率は98.8%、Ⅱ部は90.2%、全体平均は98.0%、修了年次Ⅰ部は96.8%、Ⅱ部84.4%、全体平均96.0%だった。

健康診断会場でのマスク着用を呼びかけるとともに、混雑を回避するような日程設定とするなど、新型コロナウィルス感染症の状況に合わせて実施し、健康診断会場での感染は予防できた。

[学校関係者評価委員からの提言]

- ・奨学金制度の適切な運営と、リスクを回避しながらの健康診断の実施について記載されていて評価できる。
- ・奨学金のレパートリーや支援の強弱などを再度検討しても良いのではないか。
- ・民間の財団や企業から資金を募って、単年度で使うのではなく運用益型の奨学金制度等の拡充など検討できないか。
- ・各奨学金への申請数および採用数の検討が記載されていないため、奨学金の運用が「適切」であると判断する根拠に乏しい印象を受ける。本当に希望している学生に資金的援助が行きわたっているかを確認する必要があると考える。そのうえで、上乗せ・横出し（支給額の増加や採択条件の拡大）の可能性を検討し、学院固有の学生支援体制の構築を目指すことが重要であると考える。

- ・経済的な理由での退学も減らしたい。他大学では 7 割もの学生さんが奨学金を受けている例もあると聞く。必ずしも経済的な理由だけで奨学金を受けている学生ばかりではないと認識している。
- ・奨学金についての手続きなど、学生に対してきめ細かく行うことを望む。
- ・健康診断の受診率は毎年高く評価できる。引き続き高受診率を維持する事を望む。
- ・健康診断の実施状況は定量的な振り返りが記載されており、評価として充実しているように見受けられた。受診率の目標数値を具体的に設定することで、次年度の実施に向けてより一層具体的なアクションを検討することが可能になると思われる。

5 卒業生・社会人への支援

[本学院の現状]

卒業生の会であるすみれ会ではすみれ会の認知向上及び各分野で活躍している卒業生を紹介するとともに、卒業生同士のつながりもテーマに、すみれ会公式サイトにおいて卒業生紹介企画「LINKS」を月 1 回のペースで更新しており、本学院の公式ホームページサイトにおいても紹介を行った。

また、学院創立 100 周年を記念して行われたイベント（ファッションショー及びレセプション）により、これまで疎遠であった会員の参加が多数あり、卒業生同士の新しい交流も生まれた。

将来ファッション業界で活躍しすみれ会員として積極的に活動する人材を育成することを目的とした在校生対象の給付型奨学金について、今年度は 3 年次進級学生を含む I 部学生 3 名に奨学金を給付した。

また、卒業後にグローバルに活躍する意思を持ち、卒業後のフィールドを海外へと広げる第一歩として海外留学を志す学生に対する海外留学支援奨学金を新設し、1 名に奨学金を給付した。

[学校関係者評価委員からの提言]

- ・「LINKS」は良い企画である。在校生、卒業生ともに「なりたい自分」を想像できて、かつ何をしたらなれるのかを考えるきっかけになる企画だと思う。良い企画なので、どうやったらさらに多くの人に見てもらえるのか検討し、さらに気軽にアクセスしてもらえるようになると良いと思う。
- ・就職・転職支援として 6 社のリンクが張られているが、ここから入ってくる卒業生はほとんどいない。SNS などで拡散、周知することができれば、学生・卒業生にとって役に立と思う。
- ・すみれ会の認知向上とともにコミュニケーションの活性化が必要である。
- ・過去の卒業生のうち、どのくらいアクティブにコミュニケーションが取れるかを、一度確認して、アクセスできる n 数を増やす試みが必要ではないか。
- ・アルムナイは貴校の財産だと考えます。100 年以上の歴史があり、学校の規模もかなり大きいため、卒業生の数は膨大な数に登ると思う。デジタルの力を借りてネットワーク化し、今の時代に合わせた形態に整備できれば、さらに強力な財産とができると考える。
- ・海外留学支援は素晴らしい取り組みだと思います。
- ・卒業世代ごとにニーズが異なる可能性を前提に、狙いを定めた同窓会組織の活性化・認知向上施策を行うことも有用であると考える。
- ・卒業生への就職・転職支援についても、卒業直後の就職未決定者のみならず、育児などで離職した卒業生でファッションの知見・技能をもって復職したい人々を対象にサポートを充実させることも有意義ではないかと考える。同窓会組織の活性化と連動しうるアイデアとして、提案する。

- ・歴史の長い学校ならではの財産として、卒業生の連携をいかに強化できるかという課題に、100周年を機に改めて取り組むことに期待したい。2018年度からの奨学金制度に加え、海外留学を目指す学生を支援する奨学金制度の新設は評価できる。
- ・卒業生の再就職や起業支援は、支援体制の周知が課題である。

5) 教育活動

①学校のカリキュラム編成

[本学院の現状]

各科の人才培养目的に合わせて、基礎から実践力まで専門知識をしっかりと身に付けさせるために、教育課程編成委員会を主管に随時カリキュラム編成の見直しを行っている。

アパレル業界にて急速に拡大している3D分野の人才培养を目的として、2024年度に、ファッション工科専門課程のアパレル技術か3年次に「バーチャルファッションコース」を新設するため、授業カリキュラム検討、担当教員のスキルアップ、非常勤講師の選定等、充実した授業運営となるよう調整・準備を行った。

また、引き続き教科書のデジタル化を推進しており、本年度は、本学院独自の教科書である文化ファッション大系の中から、服飾造形講座5冊、服飾関連専門講座1冊(FB)をデジタル化した。

本年度は、4年ぶりに本学院専任教員の海外研修(パリコレクション)を実施した。定員2名に対し参加者は1名であったが、パリコレクションや展示会の視察を行い、国際的視野を広げるとともに、研究や授業に活かしている。また報告会を職員会議にて行い、視察内容を全教員に共有した。

[学校関係者評価委員からの提言]

- ・学院の基礎教育・カリキュラムは間違いなく必要な知識・技術を身に着けることができるものだと確認し、評価する。あとは、企業での各職種がどのような守備範囲で仕事をしているのか、どのような変化が時代と共に起こっているのかという情報を授業に反映させる仕組みを取り入れると良い。
- ・3D技術も各社取り入れつつあるが、実際には使いこなせていない現場もあるので、そこをどのように指導していくかは、まだまだ課題として今後も残ると思う。時代にあわせたコースの新設や既存カリキュラムの改善など課題設定と点検・評価が適切に実施されている。
- ・バーチャルファッションコースのように社会の需要(ニッチ)に合わせたコースやカリキュラムに期待する。
- ・常に時代に沿った教育を提供できるよう、課題意識を持ち適切に取り組んでいることを高く評価する。しかしながら、DX化が急速に進み、変化の早い時代であるため絶えず検討が必要であり、点検を継続していくことを期待する。
- ・教科書のデジタル化には可能性を大いに感じる。新設コースにも期待している。
- ・「2023年度の課題」と「2024年度への課題」がほぼ同文言であり、当該年度の事業を経て具体的に改善課題が抽出されているように見受けられない。または、課題抽出の粒度が大きすぎるため、点検・評価に記載されているアクションが何を目的に実施され、どの程度成果を挙げたのかを振り返ることを難しくしているように感じる。
- ・「～専任教員が企業の最新情報を～」とされていた2023年度の課題記載に対し、「～専任教員がファッションの最新情報を～」と変更されている点について、点検・評価のなかに根拠が記載されていない。もし誤植でなければ、実践的なカリキュラムの充実において前年度と比べて「企業」よりも「ファッション」に力点を変

更する動機が、期中の活動から得られた反省や課題と紐づけられて説明されるべきであると考える。

- ・バーチャルファッショントースの新設に向け、カリキュラムの内容の検討、担当教員のスキルアップなど準備を整えてから授業を開始している点、DXなど社会変化への対応に柔軟かつ迅速に取り組んでいる点は評価できる。
- ・専任教員のパリコレ研修、企業との連携による実践的な授業の提供も各科で行われていて、適切なカリキュラムを編成できていると思う。

②課程・教科のカリキュラム編成、授業研究、学生対応

【本学院の現状】

それぞれの課程及び学科は教育理念、人材育成像の具現化に向け、特色を持ったカリキュラム編成を行っている。

実践的な教育を通して意欲向上と就職に対するさらなる意識付けをするため、特別講義、カリキュラムの見直しを行い、コンテスト活動やインターンシップ、企業とのコラボレーション活動など、学びの場が広がるよう授業研究を絶えず実施している。

【学校関係者評価委員からの提言】

1. 服飾専門課程

- ・カリキュラムの随時見直しについては評価できる。
- ・コンテストへの参加機会が増えており、向上心と自主性を育む仕掛けは良かったと評価する。
- ・各科の人材育成像に沿った教育内容で、コンテストを意識したり、時代対応を考えて工夫したカリキュラムを組んでいる点が評価できる。
- ・企業との連携はどんどん増やしていくと良い。
- ・実践的な教育に期待している。
- ・これまでの教員の経験をもとにカリキュラムが改善されてきたことを評価する。
- ・DXを学生の授業の理解度や興味の深度などを図る仕組み作りにも取り組んで欲しい。
- ・時間割を工夫する、クリエイション（制作）の時間を単位として認めるなど、学習成果を上げる様々な工夫をされていると感じる。コンテストへの意識づけ、企業コラボレーションなど、卒業後、即戦力として活躍される人材輩出を目指している点を高く評価する。
- ・「2023年度の課題」と「2024年度への課題」における表現に差分を付けられた理由について一層深堀し、その内容が点検・評価のなかで言語化されるべきであると思われる。例えば 2024年度への課題において
 1. 「～様々な学生に対応できる指導法」の検討が重要であると考えられたのはなぜか？
 2. 「～イベントに積極的に参加できる～」という要素が追加されたのはなぜか？
 3. 「学生のためになる→学生の意欲向上につながる」と変更されたのはなぜか？この回答の中にこそ、一年間の事業を通じて得られた現場課題や気づきが含まれていると考える。
- ・全体的に点検・評価の欄において、改善すべき課題が記載されていないことに課題を感じる。

2. ファッション工科専門課程

- ・各科の取り組み・企業とのコラボの多さに驚く。数ある取り組みを運営することは非常に煩雑で困難なことだと思う。企業側が学校に対して、人材育成のための資金協力や援助をしてくれるようなコラボレーションが実現すると良い。服飾学校の代

表格である学院は、ファッション業界の今後を左右する大切な教育機関である。業界をあげて守っていかなければならない学校だと思う。

- ・各科の特徴に合ったカリキュラム、企業コラボレーション、コンテスト参加を促す活動が組まれており、高く評価できる。体験授業を通して入学希望者と現実のミスマッチを防ぐといった、休退学者を減らすために具体的な取り組みがされていることも、教職員の思いの現れだと感じる。
- ・各科で人材育成像を設定し、目標に合ったカリキュラムを編成し、社会や業界の変化に対応した教育を行うために国内外の企業と広く協業し、即戦力になる教育を行っている。学生の変化にも対応し、教え方を工夫して理解を深め、楽しく学べるように教育内容と教育手法を見直しながら、保護者も含めた生徒指導により、休退学者を減らす取り組みを行っている点など、全体に高く評価できる。
- ・休退学者を減らす取り組みは、成果が上がっている科のやり方を他科も応用すると、更なる効果が期待できると思う。
- ・これまでの教員の経験をもとにカリキュラムが改善されてきたことを評価する。
- ・DX を学生の授業の理解度や興味の深度などを図る仕組み作りにも取り組んで欲しい。
- ・実践的な教育に期待している。
- ・「2023 年度の課題」と「2024 年度への課題」がほぼ同文言であり、当該年度の事業を経て具体的に改善課題が抽出されているように見受けられない。または、課題抽出の粒度が大きすぎるため、点検・評価に記載されているアクションが何を目的に実施され、どの程度成果を挙げたのかを振り返ることを難しくしているように感じる。

3. ファッション流通専門課程

- ・様々な取り組みがなされており、概ね良い。
- ・スタイルリストやモデルコースなど、一般企業と違う就職のかたちを取る必要がある職種を目指す学生に対して、ご本人のモチベーション維持・前向きな気持ちの醸成を大切にして欲しい。
- ・ショップスタイルリストコースでは、企業の協力を得てインスタグラムのライブ配信スキル強化を行ったとのこと。IT技術に強いアパレルにはどんどん協力してもらうことによって、学生のレベルアップにつなげると良いと感じる。企業の取り組みよりも先端の施策を考えつく学生が増えてくるものと思われる。
- ・ビジネスを意識し、学生等にコミュニケーションや社会課題を認識させる取り組みがなされている点を高く評価する。卒業後の進路については、以前より幅広くなっているのではないかと推察されるので、点検した方が良いのではないか。
- ・時代性を取り入れたカリキュラムは評価する。今後にも期待している。
- ・「時代に合わせたカリキュラム」とは具体的にどのような時代観において、どのような要素を意識したカリキュラムの事を指すのか、またそれがどのような方法でどのように実現されたのか、点検・評価の具体的な基準を明確にする必要を感じる。
- ・学生のドロップアウト防止策に関する検討においては、該当する学生の傾向を把握し、具体的な対応を講じる姿勢が確認でき、次年度に向けてのアクションも記載されているため、状況の改善が期待できる。
- ・各コースで就職や専門的な業務に携わることを意識し、実践的な専門教育を行っている点が評価できる。
- ・SNS を使ったプロモーションや販促、持続可能性を考えたビジネスモデル作りなど、時代の変化に合わせた教育を行っている点も評価できる。
- ・各種検定試験の受検や、希望する就職実現の支援、コミュニケーション力やマネジメント能力の向上を図る取り組みを行っている点も社会に貢献する準備として良い教育内

容で、適切な教育を行っている。

- ・これまでの教員の経験をもとにカリキュラムが改善されてきたことを評価する。
- ・DX を学生の授業の理解度や興味の深度などを図る仕組み作りにも取り組んで欲しい。

4. ファッション工芸専門課程

- ・他の服飾専門学校でも工芸専門課程を設置している事例は少ない中、幅広いアイテムのスペシャリストを育成する教育を行い、企業や学内外との協業、コンテストへの挑戦など目標となる課題を設け、技術や知識の向上に努めている点は評価できる。
- ・ファッション工芸専門課程の存在意義は大きいと思う。テキスタイル、帽子、ジュエリー、バッグ、シューズといった専門スキルをもった学生は貴重な存在である。
- ・新卒で就職することが難しい職種ではあるが、キャリア採用時は希少性が高く、採用者側としてはなかなか見つからない人材となる。新卒で就職できる企業とのパイプを複数作って、これからも業界に人材を派出し続けることを願う。
- ・就職希望者のための就職意識向上の工夫、個別対応の配慮も評価できる。
- ・产学連携を強力に推し進めて、そこからの就職を勝ち取ることが必要である。
- ・どの課程より企業とのコラボを重視しなければならない課程と思われる。
- ・ファッションは総合的なものなので、他科との連携で充実を図っている点を高く評価する。ただ、学生を増やすための対策、つまりは魅力をアピールすることも必要だと思う。
- ・コンテストの取組の評価として、学生がチャレンジする機会になったという振り返りが素晴らしいと思った。成長につながる取組を期待している。
- ・点検・評価のなかで新たな課題「多様化する学生の気質に対する取組の強化」が追加されており、年間の活動から、更なる改善に向けた具体的な振り返りが行われている。この 2024 年に向けての課題は、個別の科の課題欄にも共通して記載されており、ファッション工芸専門課程全体の改善意欲と運営方針の一貫性を感じた。
- ・バッグデザイン科での 1 つの作品に 3 人が異なる立場で関わって分業する演習と、ファッションシングツ専攻科の専門外のグッズを制作する授業は興味深く、高い教育効果が期待できる。
- ・専攻科への進学希望者が人員の不足で進学できない事態が、今後は発生せず、なるべく志望を実現できる体制作り期待したい。
- ・これまでの教員の経験をもとにカリキュラムが改善されてきたことを評価する。
- ・DX を学生の授業の理解度や興味の深度などを図る仕組み作りにも取り組んで欲しい。

5. II部服装科・II部ファッション流通科

- ・昨年まで点検の対象になっていなかった就職に関する実績が上がっており、非常に嬉しく思う。就職率 2022 年 88.2%→2023 年度 90.0% という数字は立派だと思う。
- ・II 部の入学希望を増やせる仕組み作りも強化していただきたい。
- ・動画教材の活用、1-2 年合同講義、学生の意見を取り入れるなど、限られた時間を有効に使い、学習効果を最大にするよう様々な工夫がされている点を評価する。
- ・II 部で多様な学生を受入れ、I 部と同等のカリキュラムを元に、多様性のある授業で 3 学期制にして希望する学科をより多く受講出来るように工夫している点は評価できる。
- ・II 部学生募集の特性であることは理解しながらも、「多様性」という言葉が多用されており、どのような多様性に対し、どのような対応を実施しているのかが分かりにくい印象を受けます。多様性の分類と、分類ごとの対応を整理しなければ、際限なく多様な対応を設計・実施することになるため、定量的・分類的なアプローチが

科の運営の中に導入・検討されることを提案する。

- ・これまでの教員の経験をもとにカリキュラムが改善されてきたことを評価する。
- ・DXを学生の授業の理解度や興味の深度などを図る仕組み作りにも取り組んで欲しい。

6. 関連科目

- ・関連科目については数が多いが、受講しておくとかなり力になる授業が多いと感じる。
- ・就職におけるデザイン画は、バランス・感度・スピードなどが大切ですが、雑貨も含めたトータルコーディネートの力も判断基準になる。単品だけを上手に表現するだけでなく、全身のコーディネートとブランドに合ったリアルさの中に、キラリと光るセンス・工夫を盛り込んでいくよう期待する。
- ・語学も益々必要になっている。これからは英語が使えないファッショントレーナー業界で成功することは難しくなってくる。職種に関係なく、語学の習得は必須である。
- ・DXを学生の学びの深度にも取り入れてほしい。
- ・学びの広さや深さを定量評価できるアプリケーションの開発・運用を行ってはどうか。（ゲーミフィケーション的に学びを数値化）
- ・デジタルツールの活用、他授業との調整など、授業運営において工夫されていることがわかります。
- ・学生同士のグループワークの成否にかかる要因や、プレゼンテーション作成スキル向上に関する授業環境の影響など、他の授業やワークショップにも応用可能な課題が抽出されている。今次の点検・評価を通じて全学に共有されることが望ましいと考える。
- ・各科目で生徒数やコマ数の変更、学生気質に対応できるように工夫して授業運営を行っている点が評価できる。
- ・情報教育の人手不足他の課題、放課後の教室使用や教員対応が必要な授業がある等の課題の提示は適切である。

③学外授業

[本学院の現状]

全学科 1 年次に行っていた郊外研修 I（コミュニケーションキャンプ）は、研修先として利用してきた文化北竜館が閉鎖され、100 名程度を安定的に受け入れられる代替の外部施設を確保することが難しいという点と、宿泊を伴う研修に抵抗感のある学生が増えているという状況を総合的に判断し、クラスの親睦、コミュニケーションを促進する日帰りのプログラムを、各科の状況に合わせて実施をした。

研修旅行は、これまで修業年限 2 年課程は 2 泊 3 日、同 3 年課程は 3 泊 4 日としていたところ、予算内で効果的に充実したプログラムを実施できるよう、修業年限に関わらず 2 泊 3 日でも可とし、日数がコンパクトになっても質の高い経験ができるよう研修内容の検討を行い実施した。

コロナ禍により、2019 年度の実施を最後に実施を見送っていたヨーロッパ研修旅行を実施し、募集人数に対して 2 倍の学生から応募があり、参加者全員、怪我・事故なく旅程を終了した。

インターンシップ、企業研修については、学科の特性や学生の希望職種の幅が拡大していることから、引き続き新規受け入れ先の開拓を積極的に行い、9 社から新規にお受け入れいただいた。また今年度から、単位付与を行う全てのインターンシップ、企業研修において、受け入れ企業との「インターンシップに関する覚書」を締結し、学生には「誓約書」の提出を必須とした。学校と企業とが共通認識をもつことによるトラブル防止と、学生の意識向上につながった。

コラボレーションについては、学生が任意で参加できる企画を多数実施し、幅広い内容の中から選択できるようアレンジした。

各コンテストの説明会情報や募集要項は、受け取り次第すぐに教員や学生に周知した。その際、募集要項から読み取れない情報がある場合は主催者に確認し、教員および学生の疑問を事前に解消するよう努めた。一部、審査方法が一般的なコンテストと異なるものもあるため、実際に審査に臨んだ学生から話を聞くなど、次年度以降の学生サポートに役立てるよう取り組みを行った。

[学校関係者評価委員からの提言]

- ・校外研修Ⅰはなくすことが時代の流れに合っていると思う。点検の通り、宿泊を嫌う方は社会人でも増えており、企業の社員旅行も廃止や日帰りが多い実情である。それよりも北竜館の経費削減効果のほうが今後を考えると必要だったのではないかと思う。
- ・学外実習の状況は、予算・日数などの調整により適切に運用されている。
- ・海外研修も復活できて良かった。可能な限り見聞を広げ、豊かな人生の一助となることを祈る。
- ・有償のインターンシップから社員採用につがった事例があつたが、今後は益々増えていくのではないか。
- ・インターンシップと海外研修の状況は、適切に取り組まれている。
- ・コラボレーションの状況は、約50件のコラボレーションに取り組まれていることを評価する。
- ・コンテスト活動の状況は、コンテスト受賞にどんなメリットがあるのかを具体的に発信するのが良い。
- ・インターンシップ、コラボレーション企画、コンテスト活動など、学外で行われる様々な企画がされており、実学という意味で非常に評価できると思う。
- ・コラボレーションの取組には大いに期待しています。
- ・関連する各施策の学校運営上の目的と目標を明確にしたうえで、年度内事業のアクションの十分・不十分を評価することが望ましいと考える。イベントや研修が実行できた事実だけでなく、実行した結果どのような効果が得られたか、得られた効果は企画目的に照らしていかがであったかの検討結果についてもう少し言及することを望む。
- ・インターンシップやコラボレーションを行う企業の開拓、職種の開拓に努めている点、受入れ先や取組み先が充実している点は評価できる。
- ・学外実習の新しいやり方と海外研修の研修先や研修内容は検討が必要。今の学生気質を踏まえ、研修は興味関心に対応した内容になるように学生の意見や希望を取り入れ、より良い学習や交流の機会を提供していくことを期待したい。

④学校行事

[本学院の現状]

新型コロナウイルス感染症が第5類感染症になったことにより、オフライン（対面）での実施を基本とし開催した。またイベントによってはライブ配信を実施する等、状況に応じてオンラインも活用した。

今年度の文化祭は、学生が自由なクリエイティビティを発揮できる、学生主体の作品発表の場としたほか、文化祭前日にプレスや企業の方を招いてのレセプションや、一部アイテムは商品として販売、ショー作品を撮り下ろしたスペシャルブックを製作・販売するなど、新たな取り組みを実施した。学生たちの自主性を尊重したイベントを実施することで、人としての経験値を積み上げる学びの場となった。

[学校関係者評価委員からの提言]

- ・文化祭ファッショショーンショーが学生主体となったことによるクオリティの低下は感じ

られなかった。大変良かったと思う。インスタグラムでの広報は少なかったように思うが、これも学生に任せていいべきではないか。

- ・学生の自主性を尊重したイベントの実施を評価する。今後も新しい取り組みを期待する。
- ・文化祭のファッショショーンショーを学生主体としたことで、ファッショショーンショーに携わった人たちのモチベーションは高かったようだ。常に改善していくこうとする姿勢を高く評価する。
- ・学校行事・イベントが具体的どのようなものを指しているのかあいまいな印象を受けます。一つ一つのイベントや取り組みには個別に目的や目標が置かれるべきため、イベントごとに設定された目標が果たされたのかどうか、どの程度果たされたのか、という観点で、さらなる点検・評価が行われることが望ましいと考える。
- ・文化祭ファッショショーンショーを学生の自主性を尊重したイベントかつ自由なクリエイティビティを発揮できる作品発表の場として変更した点は評価できる。
- ライブ配信などオンラインとオフラインを融合させるなど工夫をしている点も評価できる。

⑤課外活動

[本学院の現状]

コロナ禍で停滞していた委員会・クラブの活動を再開させるにあたり、経験者が少ない中リーダーシップの育成を目的に、一人ひとりの役割を明確化し、イベントの企画・実施等の段取りを学生に任せるなど、試行錯誤をしながら実施した。学友会委員を対象とした委員研修会を実施し、100周年にあたり文化服装学院の歴史についての学院長講話や、事前に学友会が学生を対象に行ったアンケートを元に、教育環境の改善や各課程の特徴、カリキュラムについて学校側と話し合い、先輩から後輩へのアドバイスの機会を設けた。学生たちが文化服装学院をより深く知り、学生生活における情報交換の場となった。

サステイナブルな未来・社会構築と地域の復興のため、学生主体のフリーマーケット「BUNKA CREATORS MARKET」、能登半島地震災害支援の募金活動を学内にて実施し、集まった募金はボランティア団体に寄付した。

[学校関係者評価委員からの提言]

- ・今回は学友会委員会活動の資料があり、具体的に内容を理解することができた。これからも変わらず、楽しい学生生活を送る一方で、学友会活動はボランティア活動の側面もあると思うので、今後、積極的に関わりたい学生が減っていかないか心配である。そのことはフォローできるように考えておく必要があるだろう。
- ・学生の自主性を重んじながら社会貢献の取組みにも連動し適切な活動を評価する。
- ・バザー・募金活動などの社会貢献を持続的運用することを期待する。
- ・校友会活動が活発に行われている点を評価する。
- ・課題とされている「学友会活動の活性化」とは、どのような状態を指すのか、学友会活動の目的に照らして、さらに追加すべきアクションが明確化されることが望ましいと考える。
- ・学生の自主性を尊重し、リーダーシップの育成につながる活動が適切に行われている。社会貢献活動の取り組みも評価できる。

⑥教育・成績評価

[本学院の現状]

新型コロナウイルス感染症の感染症法上の位置づけが5類に移行されたことにより、授業体制も全面的に対面授業となり、期末試験棟も従来通り実施することができ、成

績評価に影響を及ぼすことは無かったため、試験や評価に関して感染症対策は特に実施せずに済んだ。

学年末に実施される各賞審査の選出に伴う教員の負担を減らす試みとして、成績登録の時期について調整、教員への周知を行い実施した。問合せ等はほぼなく、試みの目的は達成されたが、成績提出日から成績が最終確定するまでの間に評価を変更する場合の対応について検討する必要があることが分かった。

[学校関係者評価委員からの提言]

- ・成績評価管理、評価名簿提出など適切に実施されている。
- ・電子化への移行や DX メリットを期待する。
- ・課題認識されており、適切に運用されていると考える。
- ・成績・評価は学生にとって最重要ともいえる情報であるため、管理システムの仕様や運用の確認を徹底して入出力の齟齬を排し、学生にとっての不利益を生じさせないように努める必要があると考える。
- ・成績評価の提出時期の課題への対応が記載され、適切に評価が行われていることが分かった

(7) 退学者への対策

[本学院の現状]

退学者の人数や理由を学科別に集計し、資料作成、動向の分析を行っている。昨年度に比べ、退学率が微増した。1 年生の退学率が増加したことが原因である。理由は、進路変更が最も多く、健康上の理由、学業不振と続く。

外国人留学生の退学率は、退学者全体の 10%程度、留学生全体では 5%程度だった。退学理由は家庭の事情、進路変更、学業不振が多く、学業不振の原因是、日本語能力不足の影響が大きいと担任所見より推察できた。教員はコミュニケーションをとる努力をしているが、授業全般のフォローまでは困難であるため、根本的な解決には至っていない。

[学校関係者評価委員からの提言]

- ・退学者への対策として学校が対応できるのは「学業不振」に対するものだけではないか。日本人の場合は、授業についてこられない学生をどうフォローするか、留学生の場合は日本語能力をどう上げていくか、という課題になってくると思う。進路変更や健康上の理由に対する施策はなかなか難しく、いつの世も一定の退学者は出るものだと思う。
- ・ある一定割合の退学者は考慮しつつも、状況の把握と分析に取り組みが必要である。
- ・すでに実施されているかもしれないが、節目節目のアンケート（心理的調査）などで兆候を早めに察知するなど、デジタルとアナログを活用していただきたい。
- ・退学理由の分析をしてみてはどうか。ファンションの楽しさ、ワクワク感を体験させることも有効なのではないか。
- ・退学者が 1 名も存在しない学校経営を理想とするのか、許容可能な退学理由と、学院として本意でない退学類型に対応注力するのか、データ収集・分析の前提となる方針が記載されるべきであると思う。そのうえで、本意でない退学累計の発生度合や傾向に対し、具体的な対策を講じていくことが望ましいと考える。
- ・学科別に退学者の現状や動向を把握し、分析した結果が示され、理由は提示されている。現状に対して教職員が具体的にどんな対応をし、今後、どんな対策を取るべきかの提案が、外国人留学生の退学者への対策のように記載されることに期待する。

⑧学生募集

[本学院の現状]

Web 出願システムを出願者、管理者の利便性に配慮して改修を行い業務効率化を図り、捺出された時間をお願いから間合せ等に充てた。

独自に行う、ファッション特別推薦制度の見直しと対象校の検証を行い、指定校を追加した。

受験生を確保することを目的に入試の選択肢を多く提供したが、結果として、他入試の受験者数が減少し、最終的には入試区分間で受験者を「食い合う」形となった。施策の目的は達せられなかったが、受験者の傾向を把握する助けとなり、次年度以降実施する入試制度改革の一助となった。

コロナ禍が終息し来校型イベントを中心に実施しているが、オンラインイベントの参加者数は減少傾向とはいえ、来校が難しい遠方や海外在住の方など一定数の需要があるので、引き続き実施していく。

YouTube やインスタグラム、TikTok 等のコンテンツを積極的に運用しているほか、アンケート結果から新たにピントアートでの広告出稿も開始した。

18歳人口や服飾・家政分野志望者の推移、SNSのフォロワー状況など、調査、分析を行い、本学院の認知拡大に向けた取り組みを積極的に行つた。

[学校関係者評価委員からの提言]

- ・学生募集は健闘していると感じる。広報活動においても、大学よりも実践的な授業や実技にかける時間数などの優位性を訴えて、学院の理解を広げる必要性を感じる。
- ・インスタグラムのフォロワー数もかなりいますが、運用の際に学生目線の楽しい投稿を増やす必要があるのではないかと感じる。
- ・あらゆる角度から（アパレル・ファッション・デザイン・繊維産業・工芸・・・）学院で学ぶことの魅力とメリットを伝える取り組みを行っていくことを望む。
- ・今まで取り組みのない、イベント出展や、情操教育など少し時間のかかる種まき的な取り組みも考えられる。一方で、世界のトップ 10 に入るファッションスクールとしてのアイデンティティのさらなる発信にも期待する。
- ・学生募集についてトライ＆エラーを進めている点を評価する。一方で、より一層のブランディングが必要ではないか。海外からの評価、卒業生の活躍を紹介するような広報活動などを考えてはどうか。
- ・卒業生や在校生の発想や協力を得て行う、現役の高校生にリーチできる新たな取り組みや課題の深掘り可能性についての検討など、実施したアクションから具体的な課題と対応策を生み出し続けることが肝要であると考える。
- ・学生募集、広報活動とも、現状分析と課題の設定、課題に対する新しい対策の立案を実行にしっかりと取り組んでいる点が評価できる。
- ・入試制度では、自己推薦入試の活用、広報活動ではオンラインと接触型のイベントやガイダンスの効果を検討したり、各種 SNS の効果を検証したり、積極的に時代の変化や高校生のニーズに対応した施策を探す動きに注目かつ期待している。

⑨国際交流

[本学院の現状]

法令に基づいた適切な留学生の管理を継続して行つており、東京出入国在留管理局留学審査部門より「適正校」の選定を受けている。留年し復学した留学生の在留資格の取り消しや更新不許可となるケースがみられる。留学生に対し、留年をする際のリスク周知と、学修意欲の確認をさらに徹底する。

本学院は中国上海と中国大連に提携校が 2 校あり、隨時協議を重ね協力、連携し、概ね順調に運営されている。

海外提携校と協力し、海外研修プログラムの提案や、海外より講師を招いてセミナーやワークショップを行うなどの取組を行った。取り組みへの参加者増加のみならず、留学相談件数も増加した。

[学校関係者評価委員からの提言]

- ・留学生の管理や指導は大変難しいと思うが、よく対応していると思う。
- ・今後は生産基地であり、マーケットとして関わりが深くなる ASEAN からの留学生が増える、または増やす必要があると思う。
- ・語学力については、どこまで勉強してもし過ぎることはないので、社会に出たときにすぐにでもビジネスで役立つスキルを身につけさせることを望む。
- ・留学生の受け入れ態勢の強化が必要である。
- ・留学生の比率としてアジアが多くみられるので、欧米の留学生に向けた取り組み強化も必要である。
- ・世界のトップ 10 に入るファッショントスクールとしてのアイデンティティのさらなる発信にも期待する。
- ・国によって事情も異なるものだと推察され、対策は大変だと思うが、リスク分散の考え方方は必要である。東南アジア市場が活性化してきていること踏まえ、ASEAN 地域への募集活動も有益だと思われる。
- ・留学生や国際交流機会について、質量いざれを重視するのか、学院全体の方針が明確に示されることが望ましいと思う。また、非常に難度の高い課題ですが、目的に照らした際の、国際交流の各種取り組みの効果・成果についての点検・評価がなされることも期待する。
- ・中小規模の学校では難しい国際交流に積極的に取り組む姿勢が評価できる。
- ・中国の合作校や海外提携校との取組み、交流がコロナ後に再び増えつつある現状が分かった。日本から海外へ、海外から日本へ相互に学生が交流できる機会の提供を増やすように更に体制を整え、研修プロジェクトに活発に取り組むことに期待したい。
- ・海外企業・団体・機関との協業や海外交流事業も学生に視野が広がる貴重な機会を提供するために、更なる充実は期待したい。

5. 学校関係者評価を受けて

学校関係者評価委員会の委員の皆様には、ご多忙の中、委員をお引き受けいただき心より感謝申し上げます。

外部の方々から学校運営ならびに教育活動に関し具体的な評価を頂戴することは今回で 12 度目となります。今回もファッショントスクールにおける製造部門、人事部門、メディア部門、ファッショントサービス部門等の皆様から多岐にわたり、幅広い視野での提言を頂戴することができ、改めて外部評価の重要性を痛感しております。また、日々の文化服装学院の教育活動に対し、賛同と高い評価をいただき大変ありがたく存じます。

2023 年度文化服装学院自己点検・評価に対する学校関係者委員から頂戴した提言を今後具体的に活用するため、内部評価委員を中心に検討会を開催していきます。検討会では学校関係者委員からいただいた多数の提言のうち、横断的かつ早急に取組む課題の共有を行い、次年度の目標とさせていただきます。検討会の結果は職員会議や文書で周知に努め、改善に取組んでまいります。

また本学院では創立 100 周年を経て、これからも永続的に教育活動を行っていくための様々な分野における再構築を進めております。今回頂戴したご意見はそちらにも生かす所存です。

今後とも自己点検・評価ならびに学校関係者評価を継続し取組んでまいりますので、皆様方のご協力を賜りたくお願ひ申し上げます。

ご尽力いただきました委員の皆様には改めて深く感謝申し上げます。

6. 学校関係者評価委員会開催日程

第一回

2024 年 7 月 19 日 (水) 15:30~17:00

場所：文化服装学院 C 館 4 階 C041 国際会議室

メンバー（敬称略・順不同）

委員：澤田勘志、木島 広、岡本真理子、小湊千恵美、前川祐介、河邑陽子

オブザーバー：相原幸子、門井緑、吉村香、早渕千加子、朴澤明子、

木本晴美、朝日真、八木原弘美、飯塚有葉、杉山美和、

飯島康志、伊賀美咲、浜田法子、小林克也、渡井邦重、

熊谷江理、三宅貴子

配布資料：・2023 年度文化服装学院自己点検・評価

・文化服装学院 自己点検・評価

内部評価委員による評価表及び学校関係者評価委員による評価表

・学校関係者評価委員名簿

・2023 年度学校案内書／学科一覧

第二回

2024 年 10 月 9 日 (水) 15:30~17:00

場所：文化服装学院 C 館 4 階 C041 国際会議室

メンバー（敬称略・順不同）

委員：澤田勘志、木島 広、岡本真理子、小湊千恵美、前川祐介、河邑陽子

オブザーバー：相原幸子、門井緑、吉村香、早渕千加子、朴澤明子、

木本晴美、朝日真、八木原弘美、飯塚有葉、杉山美和、

飯島康志、伊賀美咲、浜田法子、小林克也、渡井邦重、

熊谷江理、三宅貴子

配布資料：・文化服装学院 自己点検・評価

内部評価委員による評価表及び学校関係者評価委員による評価表